

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	研究科の設置									
フリガナ	ガッコウホウジン ナラガクエン									
設置者	学校法人 奈良学園									
フリガナ	ナラガクエンダイガクダイガクイン									
大学の名称	奈良学園大学大学院 (Graduate School of Naragakuen University)									
大学本部の位置	奈良県奈良市中登美ヶ丘3丁目15番1号								令和4年4月1日より変更	
大学の目的	奈良学園大学大学院は、教育基本法及び学校教育法の定めるところにより、奈良学園大学の建学の精神と教育理念に則り、学部における一般的・専門的教養の基礎の上に、高度にして専門的な学術の理論とその応用を教授・研究し、または高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識と卓越した能力を培い、もって社会の発展及び文化の進展に寄与することを目的とする。									
新設学部等の目的	本研究科では、多様化する保健・医療のニーズに対応できる科学的根拠に基づいた臨床実践力を養うとともに、地域・施設現場におけるリハビリテーション医療の複雑化、多様な障害像に主体的、多面的なアプローチとあわせ社会貢献に尽力する高度専門職業人を育成することを目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	リハビリテーション学研究科 [Graduate School of Rehabilitation] リハビリテーション学専攻 [Master Course of Rehabilitation]	2年	4人	—人	8人	修士 (リハビリテーション学) [Master of Rehabilitation Science]	年月 第1年次 令和5年4月	奈良市中登美ヶ丘 3丁目15番1号		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)										
奈良学園大学 人間教育学部 人間教育学科 [移転] (150) (令和3年12月届出)										
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	リハビリテーション学研究科 [Graduate School of Rehabilitation] リハビリテーション学専攻 [Master Course of Rehabilitation]	講義	演習	実験・実習	計	30 単位				
		16 科目	3 科目	0 科目	19 科目					
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻（修士課程）		教授	准教授	講師	助教	計	助手	
				9人 (9)	2人 (2)	5人 (5)	2人 (2)	18人 (18)	0人 (0)	8人 (8)
		計		9 (9)	2 (2)	5 (5)	2 (2)	18 (18)	0 (0)	— (—)
	既設	看護学研究科看護学専攻（修士課程）		9 (9)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	12 (12)
		計		9 (9)	5 (5)	5 (5)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	— (—)
合計		18 (18)	7 (7)	10 (10)	2 (2)	37 (37)	0 (0)	— (—)		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計			
	事務職員		44 (44)	18 (18)	62 (62)			
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	図 書 館 専 門 職 員		4 (4)	4 (4)	8 (8)			
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計		48 (48)	22 (22)	70 (70)			
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			
	校 舎 敷 地	25,885.00㎡	4,408.00㎡	26,540.00㎡	56,833.00㎡			
	運 動 場 用 地	0.00㎡	24,467.00㎡	0.00㎡	24,467.00㎡	運動場用地は奈良学園大学小学校、奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校と共用		
	小 計	25,885.00㎡	28,875.00㎡	26,540.00㎡	81,300.00㎡			
	そ の 他	5,293.00㎡	6,734.00㎡	2,100.00㎡	14,127.00㎡	奈良学園小学校 収容定員720人 基準面積7200㎡ 奈良学園登美ヶ丘中学校 収容定員600人 基準面積7200㎡ 奈良学園登美ヶ丘高等学校 収容定員675人 基準面積8400㎡		
	合 計	31,178.00㎡	35,609.00㎡	28,640.00㎡	95,427.00㎡			
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計			
		27,984.95㎡	0㎡	0㎡	27,984.95㎡	大学全体		
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体		
	29室	22室	27室	2室 (補助職員 0人)	0室 (補助職員 0人)	研究科単位で特定困難なため		
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数				
		リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻		28 室		保健医療学部リハビリテーション学科と共用		
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	リハビリテーション学研究科	2,109 [220]	31 [25]	9 [5]	204	1,912	17	研究科単位での算出不能のため、保健医療学部リハビリテーション学科と共用を含む全体数
	リハビリテーション学専攻	(2,109 [220])	(31 [25])	(9 [5])	(204)	(1,912)	(0)	
	計	2,109 [220] (2,109 [220])	31 [25] (31 [25])	9 [5] (9 [5])	204 (204)	1,912 (1912)	17 (0)	

図書館		面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体 体育館その他ス ポーツ施設は小 中高校と共用		
		1,385.24㎡		232席		122,644冊				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要				研究科単位での 算出不能のため、学部との合計		
		7,221.27㎡		野球場1面、サッカー場1面、テニスコート6面						
経 費 の 積 立 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書購入費には 電子ジャーナ ル・データベース の整備費（運 用コスト含む） を含む 設備購入費には PCソフト使用料 を含む
		教員1人当り研究費等		550千円	550千円					
		共同研究費等		2,000千円	2,000千円					
		図書購入費	0千円	1,320千円	1,320千円					
	設備購入費	5,658千円	1,950千円	200千円						
学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	950千円	750千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入							
既設大学等の状況	大 学 の 名 称	奈良学園大学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超 過 率 倍	開 設 年 度	所 在 地	
	大学院 看護学研究科	2	8	－	16	修士（看護学）	0.68	平成30年度	奈良県奈良市中登 美ヶ丘3丁目15 番1号	
	保健医療学部 看護学科	4	80	－	320	学士（看護学）	1.09	平成26年度		
	リハビリテーション学科	4	80	－	320	学士 （リハビリ テーション 学）	0.89	平成31年度		
人間教育学部 人間教育学科	4	150	－	600	学士（教育学）	0.93	平成26年度			
附属施設の概要	なし									

教育課程等の概要

(リハビリテーション学研究科リハビリテーション学専攻 修士課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基盤科目	教育心理学特論	1前		2		○									兼1	
	リハビリテーション教育学特論	1後		2		○			2							オムニバス
	医療管理特論	1後		2		○									兼2	オムニバス
	研究方法特論	1前	2			○					3					オムニバス
	研究倫理特論	1前	2			○			3	1						オムニバス
	統計解析特論	1後		2		○			1	1						オムニバス・共同(一部)
	医療政策特論	1前		2		○									兼1	
	専門職間連携特論	1前	2			○			1		1	1			兼2	オムニバス・共同(一部)
	リハビリテーション技術特論	1後		1		○			1						兼2	オムニバス・共同(一部)
	リハビリテーション研究特論	1後		2		○					2					オムニバス・共同(一部)
	小計(10科目)	—	6	13	0	—			6	2	5	1	0	兼8	—	
専門科目	臨床実践リハビリテーション学分野	運動機能障害リハビリテーション学特論	1後		2		○		2	1						オムニバス
		内部機能障害リハビリテーション学特論	1後		2		○		1	1	1					オムニバス
		高次脳機能・心理障害リハビリテーション学特論	1後		2		○		1		1					オムニバス・共同(一部)
		臨床実践特別演習	2前		4			○	4	2	2					オムニバス・共同
	生活支援リハビリテーション学分野	地域リハビリテーション・ケア学特論	1後		2		○		1		1	1				オムニバス・共同(一部)
		疼痛ケア・リハビリテーション学特論	1後		2		○		1		1	1				オムニバス・共同(一部)
		高齢者リハビリテーション学特論	1後		2		○		3		1					オムニバス
		生活支援特別演習	2前		4			○	5		3	2				オムニバス・共同
小計(8科目)	—	0	20	0	—		9	2	5	2	0	0	—			
研究科目	リハビリテーション学特別研究	1~2通	8				○	9	2	5						
	小計(1科目)	—	8	0	0	—		9	2	5	0	0	0	—		
合計(19科目)		—	14	33	0	—		9	2	5	2	0	兼8	—		
学位又は称号		修士(リハビリテーション学)			学位又は学科の分野			保健衛生学関係(リハビリテーション学関係)								
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
<ul style="list-style-type: none"> ・基盤科目から必修6単位を含み10単位以上 ・専門科目から2つの分野のうち1つの分野を主たる分野として特別演習4単位を含む8単位以上 他の分野の特論科目から2単位以上 基盤科目又は他の分野の特論科目から2単位以上 計12単位以上 ・研究科目から特別研究8単位 合計30単位以上を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格すること。								1学年の学期区分				2学期				
								1学期の授業期間				15週				
								1時限の授業時間				90分				

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学研究科リハビリテーション学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基盤科目	教育心理学特論	教育心理学は、心理学の手法を用いて教育の科学的基礎を実証的に探究し、その知見を応用して、教育の実践に資することを旨とする学問である。教育心理学には、リハビリテーション分野と関わりの深い、成長・発達（生涯発達）、学習・認知、人格・適応、臨床・健康、特別支援・障害、学校・保育心理、測定・評価・研究法・社会などの領域がある。本講義では、教育心理学の主要な理論と、発達・学習・認知などの教育心理学的研究の方法論、ならびに、近年の研究動向と課題を学び、これらの教育心理学分野の学びを生かして人間の健康的な生活を支えるための方法について考え、リハビリテーション分野における研究や実践活動への応用を検討する。	
	リハビリテーション教育学特論	<p>(概要) 新人教育が想定する卒後3年を目途に、理学療法士・作業療法士が医療専門職として修得しておくべき知識・技能および態度を考え、そこに至る過程を熟考し、学内教育および臨床実習教育が備える教育内容を理解する。同時に、指定規則改変（2022年）に伴う診療参加型臨床実習の理念と方法を学修し、学内教育と現場教育のシームレス化を考察し、その方法を検討する。また、各施設の現状を理解し、理学療法士および作業療法士の現場教育を振り返るとともに、それに必要な教育知識や技術を検討し、現場教育における支援方法を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(7 池田耕二/10回) 理学療法士・作業療法士の教育カリキュラムの現状と課題について説明した上で、臨床実習教育前後における到達目標のあり方と診療参加型臨床実習教育の理念と方法について教授する。</p> <p>(8 飯塚照史/5回) 新人および中堅の理学療法士・作業療法士に対する現場教育の課題抽出と教育支援方法について教授する。</p>	オムニバス方式
	医療管理特論	<p>(概要) 変化し続ける社会・医療情勢の中で、保健・医療・福祉に関わる組織と業務はより多様で複雑化している。医療機関は、医療制度の現状と動向を視野に入れた広い観点から利用者に良質な医療を提供するとともに、それぞれの組織と業務のシステムにおいては各従事者の健康と安全・成長を確保するための配慮が求められる。本講義では、医療現場におけるコミュニケーション、リーダーシップ、状況認識、意思決定など医療安全と組織マネジメントに必要な基礎理論を踏まえて、医療現場でリーダーシップを発揮し、組織を健全にマネジメントできるリハビリテーション専門職として役割を遂行できる能力の向上を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(20 上野栄一/12回) 医療管理上必要な保健・医療・福祉に関する法制度、医療安全管理・医療倫理等を概観したうえで、医療現場のリスクや健康マネジメントの仕組みを解説し、組織の管理者として必要な知識を教授する。</p> <p>(21 西菌貞子/3回) 医療組織がチームとして担っている良質なサービスと、組織内従事者の能力能力育成・キャリア開発との相補的な関係を解説し、医療組織の管理者が備えておくべき重要な観点を教授する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基盤科目	研究方法特論	<p>(概要) 修士論文を作成する上で必要な研究計画及び研究デザインなど研究の基本的な態度やスキルについて学修する。大学院での学習には、論文を書く能力、とくに文章表現力の養成は重要な課題である。アカデミック・ライティングには多くの資料を読むことが必要であり、これを前提に、自分に必要な資料を選ぶ技能を習得する。続いて、集めた資料を参照するための整理の方法を習得する。自分の言葉で整理し、要約する技術を習得する。授業では、自分の興味のある課題についてのフリーライティングを実施する。引用の仕方、パラグラフの書き方に始まり、文章の構成、論文のレイアウト、参考文献の記載方法、および効果的な図表の使い方を学習する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(16 滝本幸治/5回) 研究の目的と種々の条件に応じた各種研究方法の特徴と限界を解説したうえで、研究デザインおよび研究計画作成に関する重要事項を教授する。</p> <p>(14 福原啓太/3回) 科学的論文を執筆するために必要な資料を検索し選択する技能を習得させたうえで、集めた資料を整理し適切に活用する方法について教授する。</p> <p>(15 城野靖朋/7回) アカデミック・ライティングとはどのような文章なのかを理解させたうえで、学術論文の構成や専門用語・概念の定義づけを含め、論理的な文体で説得力のある学術論文を書く基本的技能について教授する。</p>	オムニバス方式
	研究倫理特論	<p>(概要) 学術研究に携わる者が果たすべき責任とは何かという問いに、受講者が自ら答えを出すことができることを目的に、基本的人権や医療倫理、生命倫理という広い観点から問題を説き起こし、学術研究における公正性と責任ある研究活動にいたるまでを多様な視点から検討する。さらに、研究の計画から遂行、成果発表や査読にいたるまでのプロセスにおいて、研究者が果たすべき役割と責任について、教員がこれまで行ってきた研究活動の具体的事例をまじえながら授業を進める。特に、研究を実施する上で重要となる研究倫理審査を受審する上で備えるべき研究の倫理的配慮について教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 西川隆/4回) 研究倫理の基礎となる人権や医療倫理、生命倫理の歴史的背景を解説し、学術研究における公正性と責任ある研究活動のための基本的視点を教授する。</p> <p>(6 伊藤健一/4回) 学術研究一般の社会的意義と研究者の責任について解説し、とりわけ人と動物に関する研究に焦点を当て、研究を実践するうえで重要となる倫理的観点を教授する。</p> <p>(① 辻下守弘/4回) 研究倫理審査のプロセスについて概観したうえで、研究倫理審査を受審する際に備えておくべき重要事項について教授する。</p> <p>(10 藤田信子/3回) 公正と責任ある研究活動に必要な研究の計画から遂行、そして成果発表や論文投稿における査読にいたるプロセスを解説し、各段階で問題となる倫理的について教授する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基盤科目	統計解析特論	<p>(概要) 学術研究とは実証的な研究であり、それを正しく遂行するためには、統計に関する理解が必要不可欠となる。本科目では、リハビリテーション学領域の実証研究において用いられる主な統計解析手法を取り上げ、その統計分析が何を意味するのかあるいはどのような場合に使うべきなのかを解説する。また、具体的な研究事例を提示しながらSPSSなどの統計ソフトウェアを用いた統計解析を提示することにより、自らの研究課題に適用する統計解析手法をイメージできるような授業を展開する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(9 大浦智子/7回) 多変量のデータを解析する手法について解説するとともに、教員自身の研究で収集したサンプルデータの統計ソフトを用いた解析過程を提示することにより、データの性質と研究目的に応じた解析手法を教授する。</p> <p>(11 阿波邦彦/7回) 研究データの種類と特徴およびそれらに応じた統計解析法について解説し、教員がこれまで行ってきた具体的な研究事例における統計解析を例示しながら、エビデンスに基づく研究の進め方を教授する。</p> <p>(9 大浦智子、11 阿波邦彦 /1回) (共同) 学生個々の研究疑問から統計解析の計画を立案させ、統計解析の知識の応用にいざなう。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
	医療政策特論	<p>本科目では、はじめにわが国の社会環境と健康概念を理解する。また、現在推進されている保健医療政策「健康日本21」を支えている社会保障の諸制度(社会保険、社会福祉、公的扶助、公衆衛生の諸制度)を概説した上で、医療制度の現代的意味と医療制度の新しい展望についての理解を深める。また、21世紀の保健医療政策が国民の多様な健康状態を支える保健・医療の機能の推進に対し、どのような課題に直面し、高度専門職の役割はどのような方向を目指すべきかについて論じる。最後に、保健・医療経済学的な観点から保健・医療を評価する方法とその適用限界、そして保健・医療供給体制と地域包括ケアシステムの在り方などについて教授する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基盤科目	専門職間連携特論	<p>(概要) 多様な状況の対象者に保健・医療・福祉サービスを提供するための専門職間連携について、その理念と各現場での実践の経緯を学ぶとともに、現在推し進められている地域包括ケアシステムを中心に、現状の課題と将来の方向性を検討する。その中で、医学的視点だけでなく、対象者の心理的・社会的な視点にも配慮した専門職種間の有機的な連携と協業についての実践的知識および連携のためのマネジメントについて、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、介護支援専門員それぞれの専門的立場から多面的に考察し、多職種連携が果たす役割や機能について教授する。さらに各地域の特色を生かした地域包括ケアシステムの実例を検討することにより、将来受講者がそれぞれの生活地域で専門職間連携の一翼を担う能力を養成する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 西川隆/3回) 病院内チーム医療と多職種間連携教育の理念と経緯について解説するとともに、医師の立場から専門職間連携の役割と機能について教授する。</p> <p>(13 吉川義之/4回) 地域包括ケアシステムの概要を解説するとともに、理学療法士の立場から専門職間連携の役割と機能について教授する。</p> <p>(18 中島大貴/3回) 地域の特性に配慮した地域包括ケアシステムの実例を解説するとともに、作業療法士の立場から専門職間連携の役割と機能について教授する。</p> <p>(22 中島栄之介/3回) 特別支援教育における専門職間連携の経緯と現状を解説するとともに、言語聴覚士の立場から専門職間連携の役割と機能について教授する。</p> <p>(26 豊岡祐子/2回) 地域包括ケアシステムにおける介護支援専門員および看護師の役割と実践例を教授する</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基盤科目	リハビリテーション技術特論	<p>(概要) 近年のICT (情報通信技術) の発展に伴い、リハビリテーション医療のDX化 (データ・デジタル化) が急速に発展している。従来のリハビリテーションでは、セラピストの知識や経験に依存して治療が行われてきたが、先端技術を併用すればセラピストの技量を超越してより効果的なリハビリテーション医療を実践できると考えられている。本授業では、リハビリテーションの主たる対象者である高齢者に対して最先端技術であるバーチャルリアリティー技術や生体センサー技術を応用した新しいリハビリテーションの理論と臨床研究について論じた上で、リハビリテーションにおける先端計測技術の応用の実際を体感する。また先端技術と療法士の接点を学び、リハビリテーションの今後の発展と課題、先端技術のリハビリテーション応用の可能性について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(24 長嶋洋一/3回) 国内外における先端技術を用いたリハビリテーションの開発状況を概観した上で、主に生体センサーを用いたバイオフィードバックを応用するための基盤技術について教授する。</p> <p>(① 辻下守弘/2回) リハビリテーション機能を有する起立動作支援システムの基盤技術の開発について教授する。</p> <p>(25 小貫睦巳/2回) バーチャルリアリティー技術の基礎と高齢者に対する臨床応用について教授する。</p> <p>(24 長嶋洋一、25 小貫睦巳、① 辻下守弘 /1回) (共同) 教員3人で講義内容を総括し、先端技術を応用した新たなリハビリテーションの未来を展望する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
	リハビリテーション研究特論	<p>(概要) 医学研究では、基礎研究を積み重ねながら臨床研究に応用し、その結果新たに生じた問題を再び基礎研究で裏付けていくという過程を繰り返しながら、新たな評価法や治療法の開発・発展が実現して行く。本科目では、リハビリテーション領域の基礎研究の意義と実験動物や培養細胞を用いた実験手法と組織学、生化学や生理学などの解析手法について学修する。授業では、リハビリテーション基礎研究特有の文献検索と先行研究レビュー、研究目的の明確化や研究計画作成、そして研究倫理の遵守など基本的な事項について、教員が行う実際の基礎研究に基づき理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(12 野中紘士/6回) リハビリテーション領域における基礎研究の意義を解説し、実験動物や培養細胞を用いた実験手法と組織学、生化学や生理学などの解析手法について教授する。</p> <p>(13 吉川義之/5回) 創傷治癒の促進技術の開発を例として培養細胞を用いた組織病理学的実験手法を解説し、基礎的研究とリハビリテーションの実践との関連について教授する。</p> <p>(12 野中紘士、13 吉川義之 /4回) (共同) 個々の学生の臨床的疑問から仮説を抽出し、基礎的研究で科学的に裏付けるための模擬計画を立案させ、研究意欲を促す。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床実践リハビリテーション学分野 専門科目	運動機能障害リハビリテーション学 特論	<p>(概要) 本科目では、主に運動器傷害(外傷、障害)や中枢・末梢神経の障害に起因する運動機能障害に対する客観的分析法の教授を通じて、それらの評価、治療手法に関する研究や研究課題について習得する。さらに、運動機能障害の発症予防、あるいは二次的な身体障害への対応について考察し、健全な日常生活や社会活動を視野に入れた健康寿命の延伸に資する予防的支援を提案できる能力を養う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(4 橋本雅至/5回) 体幹・下肢運動器傷害リハビリテーションにおける問題点・課題の抽出、評価法、介入方法、予防法について教授する。</p> <p>(8 飯塚照史/5回) 上肢運動機能障害リハビリテーションにおける問題点・課題の抽出、評価法、介入方法、予防法について教授する。</p> <p>(10 藤田信子/5回) 運動制御に対するリハビリテーションにおける問題点・課題の抽出、評価法、介入方法、予防法について教授する。</p>	オムニバス方式
	内部機能障害リハビリテーション学 特論	<p>(概要) 本特論では内部機能障害領域における疑問や問題を自ら解決できる能力とリハビリテーションを科学的見地から考察できる高度理学療法士の育成を目的に授業を展開する。具体的にはEBMに基づく内部機能障害リハビリテーションについて解説し、併せてクリニカルクエスト(CQ)に対する文献レビューの演習を行う。さらに、CQの解決手法としての研究(臨床研究、観察研究、基礎研究)手法について教員がこれまでに行ってきた事例をまじえながら授業を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6 伊藤健一/7回) 内部障害リハビリテーションの全体像を概観するとともに、各器官障害のリハビリテーションに関するエビデンスに基づいた情報の検索方法と臨床研究に発展させる過程について解説する。</p> <p>(11 阿波邦彦/4回) 各器官の内部障害学に関する観察研究の研究手段と研究デザインおよび研究計画の作成法について教授する。</p> <p>(12 野中紘士/4回) 各器官の内部障害学に関する実験研究の研究手段と研究デザインおよび研究計画の作成法について教授する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床実践リハビリテーション学分野 専門科目	高次脳機能・心理障害リハビリテーション学特論	<p>(概要) 人間存在を生物・心理・社会 (Bio-psycho-sociality) 的次元の総体と捉えるモデルは、応用面の限界が指摘されているものの、医療の実践において重要な観点を提供し続けている。一方で、近年の脳科学・認知科学の進歩を背景に、器質性脳障害と心理障害の病態を統一的に捉えようとする病態理論が提起されている。一見矛盾するかに見える両者の理論は、脳機能に生物・心理・社会の各次元を表象する機構を想定する理論的枠組みによって統合的に把握することが可能であり、その枠組みに基づいてまた、治療とケアの戦略を導くことも期待できる。</p> <p>本講では、こうした多次元脳=認知理論の観点から、高次脳機能障害と心理障害を分析し治療戦略を立てるために必要となる脳機能解剖学に関する知識を総括するとともに、今日の有力な治療技法である認知療法、行動療法、精神分析の諸理論との関連を論じて、それらの知識を統合的に関連付けて修得させる。また事例検討を通じて、それらの病態理論を臨床的に応用する能力を養う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 西川隆/6回) 生物心理社会モデル、脳の階層的進化・発達の過程、大脳の左右半球への機能分化および半球内機能分化の概要について説明した上で、行動療法の理論的枠組みについて教授する。</p> <p>(14 福原啓太/5回) 認知療法の理論的背景や実践例について説明するとともに、精神分析学的人間発達理論について教授する。</p> <p>(1 西川隆・14 福原啓太/4回) (共同) 脳器質損傷、心理的障害、社会的問題それぞれが主な要因とみられる事例の多次元的評価と治療方法について検討する。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
	臨床実践特別演習	<p>(概要) 臨床リハビリテーションの実践過程で浮かび上がる諸問題を科学的根拠にもとづいて解決するために必要な方法論の修得を目的として、3つの専門領域の担当教員が臨床および研究に関する経験と知識を伝授するための演習を行う。具体的には、各専門領域の教員と意見交換しながら、学生自ら疑問を発掘し、学術的意義と科学的妥当性を有する研究課題へと錬成していくための、文献検索、一次情報・二次情報の入手と精選、重要文献の精読とノート作成、現時点で研究の到達点の見極めと知見の総合、課題の焦点化の過程を実体験しつつ修得する。さらに抽出された課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出し、指導教員の指導の下に研究プロトコルを試作して、その研究遂行に必要な設備・機材・人員・資金を確保するための方策、および研究協力の依頼、倫理審査の申請等の諸手続き等に関するマネジメントを考案する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(4 橋本雅至、8 飯塚照史、10 藤田信子 /10回) (共同) 運動機能障害リハビリテーションにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p> <p>(6 伊藤健一、11 阿波邦彦、12 野中紘士 /10回) (共同) 内部機能障害リハビリテーションにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p> <p>(1 西川隆・14 福原啓太 /10回) (共同) 高次脳機能・心理障害リハビリテーションにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p>	オムニバス方式・共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
生活支援リハビリテーション分野 専門科目	地域リハビリテーション・ケア学特論	<p>(概要) 地域により生活している人々のニーズは異なり、サービス提供にも工夫が求められる。リハビリテーションを必要としながら生活する人々のニーズを的確に捉え、ニーズに沿ったサービスを展開していく方法について検討する。様々なサービス提供活動の実際を知り、内容や提供方法を具体的に掘り下げ、専門職・関連機関の連携について考察することを通して、地域リハビリテーション活動の理念を理解し、包括的かつ継続的に活動を展開する力を養う。また、終末期ケアにおけるリハビリテーションのあり方についても検討する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(7 池田耕二/8回) 地域リハビリテーションの対象と現在の課題および将来の展望について解説するとともに、終末期ケアに焦点を当てて実践活動を展開するうえでの要点を教授する。</p> <p>(15 城野靖朋/3回) 地域に在住する運動機能障害者の調査法と訪問リハビリテーションの実践について解説し、地域リハビリテーションの課題と解決方法を教授する。</p> <p>(18 中島大貴/3回) 地域に在住する認知機能障害者の評価法を解説し、認知症に焦点を当てた地域リハビリテーションの課題と解決方法を教授する。</p> <p>(7 池田耕二、15 城野靖朋、18 中島大貴 /1回) (共同) 各教員の地域リハビリテーションの実践経験をもとに、現状の課題と将来への展望について教授する。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
	疼痛ケア・リハビリテーション学特論	<p>(概要) 本科目では、「人間にとって痛みとは何か」について学ぶ。痛みのシグナルは末梢の侵害受容器から末梢神経、脊髄、脳と伝わり、脳で統合されて痛みとして感じる。痛覚伝達のしくみを学び、感覚としての痛みを理解し、さらに情動、行動といった痛みの多面性について理解を深める。痛みに関連した研究論文を抄読し理解し考察する機会を与える。これらの機会を通して、臨床現場で遭遇する様々な痛みに対し適切な判断を下し対応できる能力を養う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(5 柴田政彦/5回) 様々な痛みのメカニズムと慢性化の要因、神経機構を概説した上で、痛みの訴えの強い患者に対するコミュニケーションの取り方や認知行動療法の適応と方法について教授する。</p> <p>(② 前田吉樹/5回) 痛みの認知・情動的側面に関与する要因やその計測方法について概説するとともに、恐怖条件付け学習の理論に基づいた疼痛リハビリテーション・ケアの方法について教授する。</p> <p>(13 吉川義之/4回) 痛みの緩和を目的とした物理療法の適応と限界、および痛みと関連する褥瘡や組織損傷の治療を目的とした物理療法について教授する。</p> <p>(5 柴田政彦、② 前田吉樹、13 吉川義之 /1回) (共同) 慢性疼痛の症例検討を通してリハビリテーション治療の将来的展望を論じる。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
生活支援リハビリテーション学分野 専門科目	高齢者リハビリテーション学特論	<p>(概要) 高齢者に対するリハビリテーションは、単に高齢者の特異的疾患とそれによる障害に対応するだけでなく、高齢者特有の身体的、心理・社会的な特性を理解して、リハビリテーションを行う必要がある。本講義では、高齢者それぞれの特性に応じて、日常生活の活動を高め、積極的に社会への参加を促し、それによって一人ひとりの生きがいやQOLの向上を目指すことが可能となるリハビリテーションに必要な専門的知識と技術を教授し、今後、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」における高齢者リハビリテーションの専門性を高め、リーダーシップを発揮することができる専門職を育成する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 辻下守弘/6回) 高齢者リハビリテーションの現状と課題および高齢者の身体的、心理的、社会的な特徴とリハビリテーションにおける配慮について教授する。</p> <p>(3 山形力生/2回) 高齢者リハビリテーションにおける運動器障害と日常生活動作障害について解説するとともに作業療法的な日常生活向上支援について教授する。</p> <p>(9 大浦智子/4回) 高齢者の日常生活機能と生活の質向上を目指した作業療法的アプローチおよび訪問リハビリテーションの実践について教授する。</p> <p>(16 滝本幸治/3回) 地域在住の虚弱高齢者を対象としたスクリーニングと介護予防の具体的な方法について教授する。</p>	オムニバス方式
	生活支援特別演習	<p>(概要) 臨床リハビリテーションの実践過程で浮かび上がる諸問題を科学的根拠にもとづいて解決するために必要な方法論の修得を目的として、3つの専門領域の担当教員が臨床および研究に関する経験と知識を伝授するための演習を行う。具体的には、各専門領域の教員と意見交換しながら、学生自ら自らの臨床経験を省察して疑問を発掘し、学術的意義と科学的妥当性を有する研究課題へと錬成していくための、文献検索、一次情報・二次情報の入手と精選、重要文献の精読とノート作成、現時点で研究の到達点の見極めと知見の総合、課題の焦点化の過程を実体験しつつ修得する。さらに抽出された課題を解決するための調査や実験の基本構想を案出し、指導教員の指導の下に研究プロトコルを試作して、その研究遂行に必要な設備・機材・人員・資金を確保するための方策、および研究協力の依頼、倫理審査の申請等の諸手続き等に関するマネジメントを考案する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(7 池田耕二、15 城野靖朋、18 中島大貴 /10回) (共同) 地域リハビリテーションおよび終末期ケアにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p> <p>(5 柴田政彦、② 前田吉樹、13 吉川義之 /10回) (共同) 疼痛ケア・リハビリテーションにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p> <p>(① 辻下守弘、3 山形力生、9 大浦智子、16 滝本幸治 /10回) (共同) 高齢者リハビリテーションにおける臨床研究の方法を演習形式で修得する。</p>	オムニバス方式・共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目	リハビリテーション学特別研究	<p>(概要) リハビリテーション学分野における幅広い理解を深めるとともに、臨床実践リハビリテーション学分野及び生活支援リハビリテーション学分野に関する一つの研究課題に対して、関連文献の検索と整理、研究デザインの設定からデータ収集および解析、研究結果の考察、そして論文完成に至る過程について指導する。</p> <p>(1 西川隆) 認知症を含む器質性精神障害および心因や環境因の関与がより大きい機能的な精神障害を対象として治療アプローチに関する研究を指導する。</p> <p>(① 辻下守弘) 運動機能向上を目的としたバイオフィードバックやバーチャルリアリティ技術を応用した運動トレーニングに関して研究指導する。</p> <p>(5 柴田政彦) ヒトを対象とした痛みの認知行動療法や集学的治療に関連した脳科学や臨床疫学など行動科学的な側面から研究指導する。</p> <p>(3 山形力生) 中枢神経系障害を対象にした日常生活活動支援（福祉用具などの環境支援を含む）に関して、また対人関係能力の基礎としてのコミュニケーション・スキルに関して研究指導する。</p> <p>(4 橋本雅至) バイオメカニクス・病態運動学の観点から、運動器・スポーツ傷害の要因解明やスポーツ復帰や発生予防のための効果的なトレーニングに関して研究指導する。</p> <p>(6 伊藤健一) 慢性呼吸器疾患を対象とした呼吸リハビリテーションにおける評価や治療の新規開発に関連した研究について研究指導を行う。</p> <p>(7 池田耕二) 地域における緩和・終末期の高齢者に対する理学療法や生活支援、また家族負担軽減のための介入方法について研究指導する。</p> <p>(8 飯塚照史) 手外科分野における運動機能障害に関する臨床研究について研究指導する。</p> <p>(9 大浦智子) 高齢者の生活機能向上と効果的なリハビリテーション・ケアの阻害因子の解明と評価・治療の開発に関する研究指導する。</p> <p>(10 藤田信子) 高齢者の動的・静的姿勢の認知制御がもたらすリハビリテーションの手法や効果の検証に関して研究指導する。</p> <p>(11 阿波邦彦) 慢性呼吸器疾患と肺癌に対する呼吸リハビリテーションに関して研究指導する。</p> <p>(12 野中紘士) 骨格筋障害のメカニズムや予防・改善法について、形態学的、生化学的手法を用いた基礎研究と指導をする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究科目	リハビリテーション学特別研究	<p>(13 吉川義之) 褥瘡や糖尿病性足潰瘍などの慢性創傷に対する物理的刺激の介入効果に関して臨床・基礎研究の双方から解明する研究を指導する。</p> <p>(14 福原啓太) 統合失調症の社会機能障害と語用論的機能を含むコミュニケーション能力、陰性症状に含まれる情動表出能力の関連性を明らかにする研究を指導する。</p> <p>(15 城野靖朋) 姿勢制御や随意運動の神経学的、運動学的解明によるリハビリテーションへの応用を目的とした運動制御に関して研究指導する。</p> <p>(16 滝本幸治) 要介護状態に至るリスクが高い高齢者をスクリーニングし、介護予防など効果的な予防活動を展開し効果検証を行うための研究指導する。</p>	

学校法人奈良学園 設置認可に関わる組織の移行表

令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	→	令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
奈良学園大学					奈良学園大学				
人間教育学部					人間教育学部				
人間教育学科					人間教育学科				
人間教育学専攻	120	-	480	→	人間教育学専攻	120	-	480	
中等(数学・音楽)専攻	30	-	120		中等(数学・音楽)専攻	30	-	120	
保健医療学部				→	保健医療学部				
看護学科	80	-	320		看護学科	80	-	320	
リハビリテーション学科					リハビリテーション学科				
理学療法専攻	40	-	160		理学療法専攻	40	-	160	
作業療法専攻	40	-	160		作業療法専攻	40	-	160	
<hr/>					<hr/>				
計	310	-	1,240		計	310	-	1,240	
奈良学園大学大学院					奈良学園大学大学院				
看護学研究科					看護学研究科				
看護学専攻(M)	8	-	16	→	看護学専攻(M)	8	-	16	
					<u>リハビリテーション</u> <u>シオン学研究科</u>				研究科の設置 (認可申請)
					<u>リハビリテーション</u> <u>シオン学専攻(M)</u>	<u>4</u>	-	<u>8</u>	
<hr/>					<hr/>				
計	8	-	16		計	<u>12</u>	-	<u>24</u>	